

のみは喰とも汁は吸べからず、菜は大かた精進物を本座にすゆべし、本座とは左中右の事也、當禮ははじめに湯漬にて出し、頓而めしつぎを出す事、是等の義は日を重るの振舞なり、○圖略

西國湯漬之事

西國湯漬は、飯の上を平かにして、胡桃の實にて食の上にはまをつくる、其ふちに黒ごま、芥子をよくいりて置也、扱湯をけし、のうかぬ程につぐ也、晝以前はけし、晝以後はごまの方に湯をつぐなり、○圖略

二はい湯漬之事

上戸は汁椀のを二箸のみ喰、下戸は湯を待て先食椀のを喰、其後汁椀のを喰てよろし、食椀へ再進出たり共、二杯ながら食はずは、多くる事あるべからず、

〔芳飯三峯膳式膳〕一湯漬と云は、初より湯をいる、なり、ひめと云は、二せん上て後湯をいる、なり、

〔酌并記三〕一湯漬の時は、必先盃出る、めしの時は、めしはて、盃出る也、扱酒はて、銚子取り湯出る也、○註略

一湯漬の時も、必後に湯出べし、當世出ぬといふ沙汰あれども、必出し候はて不叶事也、湯漬は、湯事なれ共、又湯を後三出也

〔酌并記二〕一湯漬の喰様の事先湯を請下に置、總を見合、座敷の衆湯を請わたして、扱箸を取て喰べし、めしをくひて、扱左の手先に香の物ある物也、先それをめしの口にくひ、それより後は、いづれのさいを喰ても不苦、汁を喰事老たる人は不苦、若き人おさなき人は、しるをすふ事わろし、汁のみを喰事不苦、扱さいしんをば、いかほども心のま、に請べし、しやうとく湯漬にかざりてくひはて候時は、残さず措くふこと本也、乍去をれば年寄たる人の事也、若き人は残しても苦しか